この出入口のこと知ってる？

阪神高速の出入口再発見！

あまがさき ひがしかいがん「尼崎東海岸」

5号湾岸線「尼崎東海岸出入口」

今も臨海部の物流を支える尼崎運河は、環境学習の場、水辺の憩いの場でもあります。

5号湾岸線「尼崎東海岸」出入口のある尼崎の臨海部には、「尼崎運河」があるのをご存じでしょうか。尼崎運河について、尼崎市立歴史博物館の辻川敦さんと、尼崎市都市整備局土木部公園計画・21世紀の森担当の安居寛敏さん、中山直樹さんに聞きました。

尼崎運河は、東は中島川（上流は神崎川）、西は武庫川にはさまれた、3号神戸線（国道43号線）より南部の尼崎港を中心とする工業地帯にあります。北堀運河、中堀運河、西堀運河、東堀運河、南堀運河の5つの運河があり、全長は6.9㎞。昭和17年頃までに、臨海部の工場への材料や製品の運搬のために整備されました。

まず尼崎の臨海部の歴史を振り返ってみましょう。そもそも尼崎市域の大部分は縄文時代は海の底。その後、武庫川や神崎川が運ぶ土砂が堆積してだんだと陸地化してきた土地です。古代から中世にかけて、海岸線が現在の阪神電車の手前近くまで南下し、神崎川河口に大物、尼崎といった新たな土地が形成されます。

神崎川河口が港町として発展を始めたのは、長岡京、平安京のころから。785年、神崎川と淀川をつなぐ開削が行われ、神崎川は内陸部の都と瀬戸内海を結ぶ舟運の一大交通路となります。九州、四国、中国地方など西国各地から食料や寺社建造用の木材などさまざまな物資が神崎川河口まで海船で運送され、ここで川船に積み替え、都へ運ばれたのです。その中心地だった大物の地名の由来は、巨大な材木を大物と呼んだからとの説もあります。

江戸時代の水路が尼崎運河の原型

江戸時代になると、尼崎は港町であると同時に、尼崎城が築かれ城下町となります。尼崎城の西側に寺町や侍屋敷が形成され、その南側には魚市場のある中在家町というまちができました。江戸時代初頭には中在家町が海に面していて、瀬戸内各地から集まった鮮魚を、急行便の小型船が都へ運ぶなど多くの船が行き交いました。

土砂がたまりやすい神崎川や武庫川河口は、江戸時代を通じても、砂の島が形成されては干拓して新しい田んぼに整備する、ということを繰り返します。海岸線は大規模に南下し、それに伴って川筋も伸び、新田には農業を支える水路も整備されます。この川筋や水路が、運河の原型となります。

明治時代後半、工業化が進むと、船の便が使え、大阪に近く労働力もある尼崎の新田地帯は重化学工業の工場地帯に姿を変えます。ただし、工場が集中するようになると、江戸時代以来の水路や港湾設備では、大きな船が運航するには不十分になってきます。そんななか、尼崎の港湾開発を担ったのが、尼崎築港株式会社という民間会社でした。運河を開削し、埠頭など港湾機能を整備すると同時に、造成した埋め立て地を売却することで工事費を回収する方法をとったのです。尼崎運河は、こうして昭和17年頃までに完成しました。

その一方で発生した問題が、工場群が地下水をくみ上げたことによる地盤沈下です。市域南部はゼロメートル地帯となり、室戸台風（昭和9年）やジェーン台風（昭和25年）など、水害にたびたび苦しめられます。そこで運河の物流機能を維持しつつ、水害からまちを守るため海岸線に防波堤を築き、船舶の通過口として尼崎閘門（こうもん）が昭和29年、完成しました。

5つある尼崎運河のうち、遊歩道も整備された北堀運河。ウォーキングをする人や釣りをする人も。北堀運河と中堀運河をつなぐ「であい橋」は、かつての関西熱化学株式会社のガスタンクをモチーフとしたモニュメントが印象的。

水質浄化施設に併設して建てられた「北堀キャナルベース」には多目的室があり、環境学習やイベント、集会などに利用される。尼崎運河の活動拠点。

運河の水を吸い上げて、二枚貝でにごりを除去し、藻類の光合成によって窒素やリンなどを吸収。さらに人工干潟部分を通過することで水質を浄化して、運河へ水を戻す水質浄化の実験装置である「水質浄化施設」。施設の南側には親水護岸が整備されており、パドルボートやクルーズ船の乗降場としても活用されている。

「尼崎市民の約半数が尼崎に運河があることをご存じないのが現状です。運河沿いは歩いていても気持ちいい場所。この貴重な地域資源をもっと多くの人に知ってもらえれば」と尼崎市の安居寛敏さん（写真右）と中山直樹さん（写真中）。
写真左は、尼崎市立歴史博物館の辻川敦さん。

市民に親しまれる尼崎運河へ

全国的に観光地化される運河が多いなか、尼崎運河は今も年間約5000隻の貨物船が通航する、物流機能を持つ運河です。また、台風や大雨が予想される際には運河内の水位を下げておき、いざという時、一定量を貯水することで、より安全な治水対策を取る役割も担っています。

尼崎運河は、環境学習の場としても活用されています。北堀運河沿いに平成24年、「水質浄化施設」を設置。この装置は、尼崎運河に生息する二枚貝が植物プランクトンを食べることなどを活用し、運河の水が装置を通過することで自然の力で浄化されるしくみです。市内の多くの小中学生が環境体験学習に訪れ、併設する「北堀キャナルベース」とともに運河での活動の拠点となっています。

パドルボートに乗って尼崎運河に浮いているゴミを回収するアマチュアスポーツチーム、運河沿いを歩いてガイドするボランティア団体、尼崎運河クルーズを開催する渡船会社などもあり、運河の楽しみ方はさまざま。昨年はNPOが中心となり、夕暮れ時の運河を満喫する大人向けのイベントも開催しました。尼崎運河は、季節ごとの水辺の景色が楽しめる魅力的なスポットです。ぜひ多くの方に訪れてほしいですね。

★寺町

尼崎城の築城にともなって、城域に散在していた寺院を集めて「寺町」とした。城下町の北西隅、武家屋敷の北側に当たり、町場から分離し寺院の力を弱めるとともに、寺院を配置して城に対する防備の役割をもたす目的があったとも考えられる。江戸時代初期には20の寺院があったとされるが、藩主の交替による移転や廃寺などにより、現在は11の寺が軒を連ねる。

★貴布禰神社

「尼のきふねさん」と親しまれる貴布禰神社。主神は海人の守護神で、古くから雨乞いの神事も行われてきた。江戸時代の藩主の信仰も厚く、松平忠告は祈雨の和歌10首を奉納している。幕末の干ばつや黒船来航の際には、藩のための祈祷が行われた。8月に開催される夏祭りには、各町内会から地車が曳き出され、尼崎市最大の夏祭りとして賑わう。行事開催時以外は、広い境内に駐車でき、バリアフリーで誰でもお参りできる神社として親しまれている

★元浜緑地

東西二つのエリアが連絡橋で結ばれており、西側には夏場に水遊びができる「わんぱく池」がある。手こぎいかだや水のカーテンなどが子どもたちに人気。東側にはロングスライダーなどの大型遊具もある。大気浄化能力や汚染耐性が高い常緑のヤマモモや落葉のユリノキなどが多数植えられており、木々に囲まれた空間でのんびり過ごすことができる。

★尼崎城

大坂夏の陣後、江戸幕府は大坂を直轄地として西国支配の拠点とするため元和3（1617）年譜代大名戸田氏鉄に尼崎城を築城させ、大坂の西の守りとした。3重の堀、4層の天守を持つ広大な城で、尼崎は多い時で約2万人が暮らす城下町として栄えた。明治の廃城令にて取り壊された尼崎城を、2018年旧家電量販店の創業者が再建し、尼崎市に寄付。城内にはお姫様や忍者の衣装が楽しめる「なりきり体験」、剣術体験、尼崎城について学べるVRシアターなどがある。

★尼崎の森 中央緑地／旧小阪家住宅

尼崎の臨海部に100年かけて森づくりを行う「尼崎21世紀の森構想」の拠点。約29ヘクタールの製鉄工場跡地に13万本の苗木を植えている。阪神高速グループも中央緑地内で「阪神高速グループの森」づくりを展開。植栽した15種類の苗木は社員等により除草や間伐を行い順調に成長、地域の生物多様性保全に貢献している。
緑地内には、江戸時代後半に建てられたとされる、芦屋市三条町から移築・復元した、かやぶき民家「旧小阪家住宅」もある。

★尼崎閘門（尼ロック）

1955（昭和30）年に完成した尼崎閘門。愛称は、尼ロック。閘門とは、水位の異なる運河や河川などで、前後の水門を交互に開閉することにより水位を調整し、船を通過させるための施設。尼崎閘門はレオナルド・ダ・ヴィンチが考案したとされるパナマ運河方式が使用され、閘門の大きさは日本最大級。高潮時や台風の際には海水が逆流しないように門を閉じ、水害からまちを守る役割も担っている。